

# 山林と宮廷のあいだで

—中晩唐の道教史における劉玄靖—

雷間

はじめに

唐代において、玄宗に次いでもっとも熱狂的に道教を崇拜した皇帝はまぎれもなく武宗である。彼が推し進めた廃仏政策は、中晩唐期の仏教と道教の関係をとてもデリケートなものに変えてしまった。多くの人は宮廷道士たちが煽り立てたがために、武宗が廃仏を決心したと信じている。それらの宮廷道士のうち、最も重要なのは趙帰真、南岳出身の劉玄靖<sup>1)</sup>、そして羅浮山から来た鄧元起の三人である。趙帰真と鄧元起の師承関係などの来歴は明らかではないが、劉玄靖は盛唐の司馬承禎から伝わる上清派の重要な支派のひとつ—南学天台派—に出自を持ち、武宗皇帝が入道して受籙した際の度師でもあった。劉玄靖をめぐるのは、多くの解き難い謎があるようである。たとえば、会昌の廃仏の際にどのような役割を果たしたのか？ 武宗が崩御した後、新皇帝が即位した結果どうなったのか？ といったものである。それらの問題についてはあらためて考察する価値があろう。『旧唐書』と『冊府元龜』によれば、宣宗は即位したあとすぐに劉玄靖を誅殺したというが、ほかの資料がしめすところでは劉玄靖は皇帝が代替わりする前にすべてを見通して南岳に帰り、宣宗が即位すると遠方から三洞の法籙を授けたという。それでは、歴史の真相はいったいどこにあるのだろうか？

劉玄靖に関する資料は非常に断片的で、しかも相互に矛盾しているところが多い。そのため、この中晩唐期の高名な道士の事跡について分かっていることは少ない。清末の学者である沈曾植は碑文を利用してその結末について要を得た分析をしているものの<sup>2)</sup>、現在に至るまで劉玄靖に関する専門的な研究はなく、概説的な著作において武宗の会昌の廃仏や南岳天台派の法系について述べる時に言及されるが、往々にして簡単にふれるだけである<sup>3)</sup>。ジェームス・ロブソン (James Robson) は唐代における南岳の宗教史を研究した際、『南学小録』と『南岳総勝集』によって劉玄靖の生涯を概括しているが<sup>4)</sup>、あまりにも簡略すぎる。しかし、幸運なことに北宋の宰相である晏殊が編纂した『類要』には、大中七年(853)に記された「広成先生劉玄靖伝」の佚文が四条残されており、『南岳総勝集』などの伝世史料と比較検討をすることで、後者の原資料を推定することができる。それらを基礎にして、劉玄靖にまつわる歴史上の謎を解くことを試みてみよう。また、この典型的なライフヒストリーの構築を通して、中晩唐期の道教の変遷とその国家との関係について認識を深めることにしたい。

注 1…各種の史料において、劉玄靖はときに「劉玄静」と記され、避諱により「劉元靖」とされることもある。以下、原資料を直接引用した箇所以外の、本文の記述では『旧唐書』武宗本紀と『唐会要』の記載にもとづき、「劉玄靖」という表記に統一する。

注 2…沈曾植『海日樓札叢』卷六「広成先生劉玄靖神道碑」の条(錢仲聯輯、中華書局、1962年)、256 - 257頁。

注 3…任繼愈主編『中国道教史』(上海人民出版社、1990年)、285頁。卿希泰主編『中国道教史』第二卷(四川人民出版社、1992年)、410頁。また、以下の文献も参照。T. H. Barrett, *Taoism under the T'ang: Religion & Empire during the Golden Age of Chinese History*, London: Wellsweep, 1996, p.90.

注 4…James Robson, *Power of Place: The Religious Landscape of the Southern Sacred Peak (Nanyue 南嶽) in Medieval China*, Harvard University Asia Center, 2009, pp.174-176.

注5…李冲昭『南岳小録』は『道蔵』第6冊（文物出版社・上海書店・天津古籍出版社、1988年）所収、285頁。作者による昭宗・天復二年（902）の自序が冒頭にある。

注6…『道蔵』本の『総勝集』は一卷のみで、原書巻中の道観に関する部分しかなく、仏寺についての内容はすべて削除されている。その道観に関する項目でも宮観ごとの篇末についている碑文の目録が省略されている。つまり、原書から抜き書きしたものにすぎない。（『道蔵』第11冊、111 - 120頁）『大正蔵』に収められている『総勝集』は日本の内閣文庫の明嘉靖本によるものである（高楠順次郎・渡辺海旭編『大正新修大蔵経』第51巻、大正一切経刊行会、1927年、1055 - 1092頁。）

注7…『大蔵経』と『道蔵』以外の『南岳総勝集』の版本については、劉勁「陳田夫與く南岳総勝集」（湖南省道教文化研究中心編『道教與南岳』所収。岳麓書社、2003年、218 - 222頁）を参照。

注8…『宛委別蔵』（江蘇古籍出版社、1988年）第49冊、1 - 256頁。

注9…この版本の由来と詳細については、葉徳輝『郎園讀書志』（楊洪昇点校、上海古籍出版社、2010年、167 - 168頁）を参照。この版本には非常に鮮明な

## 一、劉玄靖に関する碑文・伝記

劉玄靖が生涯を通じて主に活動していたのは南岳であり、そこは彼の安心立命の地、そして修行を完成させるための基礎となる場所でもあった。よって、彼に関する記録も多くは衡山と関係している。劉玄靖の事跡を比較的多く記している初期の文献には唐末の道士・李冲昭の『南岳小録』があり<sup>5</sup>、次に南宋の陳田夫が撰した『南岳総勝集』三巻（以下、『総勝集』と略称する）がある。『総勝集』は南宋の孝宗・隆興二年（1164）に完成した南岳衡山の山志であり、作者の陳田夫は紫蓋峰に隠居すること三十余年、南岳の山水・名勝・寺観・古跡について自らの掌を指すがごとく通じており、みずから高僧や異人が隠居・修道した霊跡を訪ね、関連する文献と総合して詳しく記述している。『南岳小録』と比べると、『総勝集』は紙幅も多く、内容もより豊富である。前者がもっぱら道教の霊地や人物について述べるのとはちがひ、後者は南岳の仏教と道教の名所をあわせて記載しており、そのため仏教の『大蔵経』にも道教の『道蔵』にも収められている<sup>6</sup>。この書物には蔵外に伝わる版本もあり、中国国家図書館所蔵の宋刻本も存在する<sup>7</sup>。しかし、清の嘉慶年間に至るまで、宋本は人に知られておらず、それゆえ阮元の編纂した『宛委別蔵』に収録されているのも明代の倣宋本であり、原本のレイアウトを毎行20字から21字に変更している<sup>8</sup>。光緒三十二年（1906）になって、端方が大金を出して北京から購入した宋本をもとにして、長沙の葉徳輝が重刻をした。宋本の形式により、刊刻も精緻なものである<sup>9</sup>。なお、本稿で引用する『総勝集』は特にことわりがないかぎりはこのテキストを使用し、『宛委別蔵』などのテキストで校勘する。

『総勝集』には、劉玄靖に関する碑文史料が多く収められている。巻中の「石室隱真岩」の条には、大中五年（851）の冬十月に仙去したのち、「兵部侍郎の蕭鄴は其の『碑』を文し、吏部侍郎の趙櫓は『伝』を為り、太子少傅の盧璠（潘）は『石室銘』を作り、道士の張堅白は『内傳』を為る。今はただ『内傳』および『神道碑』の存し、銓徳観に在り。いま基址は尚ほ在り<sup>10</sup>」という。これにより南岳にはかつて劉玄靖に関する石刻が四種類あったことが知られるが、道士が死去したのちにこれほど多くの記念的な碑文が世に出るとするのは、唐代道教史上においてまず見られないことである。惜しむらくは、陳田夫が『総勝集』を撰した時には二つの碑文しか銓徳観に残っておらず、具体的にどの碑文なのかも異説があることである。宋代の「銓徳観」とはすなわち唐代の衡山で最も影響力を持っていた道観の「衡岳観」であり、北宋・徽宗の宣和六年（1124）に改名している。『総勝集』巻中「衡岳観」の条の末尾には「観に碑文有ること六」と記され、そのうちの二つは以下のものである。

広成先生神道碑（翰林承旨蕭鄴撰、太子少傅致仕盧璠書）

## 広成先生内傳（吏部侍郎趙櫓撰）

明らかに『総勝集』の二か所の記載には矛盾が存在している。「石室隱真岩」の条では「広成先生内傳」は張堅白が撰したとされ、「衡岳観」の条では趙櫓の作とされている。実際には、「内伝」の作者は道士張堅白であり、杜光庭が『録異記』でこの人物にふれている<sup>\*11</sup>。「内傳」と称されているのは、道教の内部から見た劉玄靖の事績である可能性が高い。というのも、蕭鄴や趙櫓といった士大夫官僚とはちがひ、張堅白自身が道士だからである。南宋時代の銓徳観に残されていたのは趙櫓が記した「伝」であって、張堅白の「内傳」ではなく、『総勝集』中の二箇所に入る「内」の字が衍字であることは、以下で証明されることになるであろう。

また、『南岳小録』には、衡岳観の「観内に田先生の得道降真堂・劉天師の真堂有り<sup>\*12</sup>」とされ、その「劉天師」はまぎれもなく劉玄靖であり、「田先生」はその師である田虚応（田良逸）を指している。この師弟は衡岳観の発展において重要な地位を占めており、それゆえ両者の真堂が存在していた。よって、「広成先生神道碑」と「広成先生伝」は「劉天師の真堂」の前に立てられていたと推測できよう。

### （一）「広成先生劉玄靖神道碑」

宋代の『宝刻類編』巻五「盧宏宣」の条には「広成先生劉玄靖神道碑」（以下、「劉玄靖碑」と略称する）が「蕭鄴撰、（盧宏宣）八分書。大中五年（851）、潭<sup>\*13</sup>」と記されている。この碑はもう失われているが、陳尚君の『全唐文補編』には宋の呉箕『常談』などによる佚文が収められている。そこには以下のようにある。

武宗朝の権を擅にする者は、神仙をもって睿思を絆（つな）がんと欲し、しばしば天下の術士を致す可し、不死の薬を求む可しと言へば、乃ち先生を召すを命じ、銀青光禄大夫・崇玄館大学士に除し、紫綬を加へ、号して廣成先生と曰ふ。崇玄館を創り、印を鑄りて吏を置く<sup>\*14</sup>。

また、『全唐文又再補』では『類要』によって「武宗乃ち先生を羽詔し、崇玄観を創り、印を鑄して吏を置く」として数文字を補っている<sup>\*15</sup>

この碑文を書いたのは蕭鄴であり、『新唐書』巻一八二の伝にはこうある。

蕭鄴、字は啓之、梁の長沙宣王懿の九世の孫なり。進士の第に及び、監察御史・翰林学士に累進し、出でて衡州刺史と為り、大中中、召されて翰林に還り、中書舍人を拝し、戸部侍郎に遷り、本司を判じ、工部尚書同中書

電子版をインターネットでダウンロードすることができる。その内のひとつが澤田瑞穂氏の旧蔵本で、現在は早稲田大学の風陵文庫に所蔵されている。URLは以下のとおり。

[http://archive.wtl.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19\\_f0069/](http://archive.wtl.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0069/)

注 10…「少傳」の二文字はもともと欠けているが、『宛委別蔵』と『大正蔵』本によって補った。さらに、「石室銘」を撰したという「盧藩」は「盧潘」の誤りである。『南岳小録』に「聖寿観、もと靈夏の盧尚書、名は藩の書堂にして、咸通六年（865）を以て抗表もて奏し捨して聖寿観と為す」（863頁）とあるが、その中の「盧藩」もまた誤りである。晩唐時代に靈武を管轄した盧尚書とは盧潘のことである。孫光憲『北夢瑣言』巻十二「盧藩神俊」の条には「唐盧尚書藩、文学を以て進士の第に登り、英雄を以て自ら許す。数鎮を歴し、靈武の連帥に薨ず」とある（中華書局、2002年、248頁。）この点校者も「盧藩」は「盧潘」とすべきだとしている。本条の校勘記〔一〕を参照。呉廷燮『唐方鎮年表』巻一「朔方」の考証によると、盧藩が靈武に赴任していたのは咸通十二年（871）から乾符元年（874）の間である（中華書局、1980年、1311 - 1312頁。）あきらかに『南岳小録』の「盧藩」も『総勝集』の「盧藩」も、ともに「盧潘」の誤りである。

注 11…杜光庭『録異記』  
卷一「司馬凝正」の条。『道  
藏』第 10 冊、858 頁。

注 12…李冲昭『南岳小録』  
「衡岳観」の条。862 -  
863 頁。

注 13…『石刻史料新編』  
第 1 編第 24 冊所収。新  
文豊出版公司、1977 年）  
18475 頁。

注 14…陳尚君輯校『全唐  
文補編』卷 81（中華書局、  
2005 年）、995 頁。

注 15…『全唐文又再補』  
卷 5（陳尚君輯校『全唐文  
補編』所収）、2310 頁。

注 16…『新唐書』卷  
一八二「蕭鄴伝」（中華書局、  
1975 年）、5365 頁。

注 17…郁賢皓『唐刺史考  
全編』卷 167（安徽大学  
出版社、2000 年）、2443  
頁。

注 18…嚴耕望『唐僕尚丞  
郎表』卷 18（中華書局、  
1986 年）、963 頁。

注 19…『宝刻叢編』卷八  
（『石刻史料新編』第 1 編  
第 24 冊所収）、18233 頁。  
この碑の全文は『文苑英華』  
卷九一五にみえる（中華  
書局、1982 年）、4817 -  
4819 頁。

注 20…『新唐書』卷  
一九七「循吏・盧弘宣伝」、  
5632 - 5633 頁。

門下平章事を以てす<sup>\*16</sup>。

郁賢皓氏の研究によれば、蕭鄴が衡州刺史として任地に赴いたのは宣宗の大  
中三年（849）であるが、その任期は短く、翌年には衡州刺史は李侗にかわつ  
ている<sup>\*17</sup>。『総勝集』には「兵部侍郎蕭鄴が其の碑を文す」とあるが、嚴耕望  
氏の考証によれば蕭鄴が兵部侍郎の任についたのは大中十年秋なので<sup>\*18</sup>、『総  
勝集』の記述は正確ではない。また、『宝刻叢編』巻八によると、蕭鄴は「唐  
嶺南節度使章正貫碑」を撰した大中六年には「翰林学士中書舍人」と称してお  
り<sup>\*19</sup>、本伝にある「大中中、召されて翰林に還り、中書舍人を拝し」たとい  
う記載とも符合する。これはおそらく「劉玄靖碑」を書いた時の官職でもあつ  
たはずである。いずれにせよ、当時の蕭鄴はすでに衡州を離れ、朝廷にもどり  
要職についていた。彼によって衡山の高名な道士についての碑文が記されると  
いうのは理にかなっているように思われる。というのも、南岳は衡州の領内に  
あり、二年前に当地の地方長官となっていたからである。

『宝刻類編』はこの碑文を書いたのは「盧弘宣」だとするが、この「宏」は  
「弘」を避諱したものであろう。この人物も晩唐の名臣であり、『新唐書』に伝  
が存在する。略して引用すると以下のようである。

盧弘宣、字は子章、元和中に進士の第に擢す。……開成中、山南・江西に  
大水あり、弘宣と吏部郎中の崔璿に詔して道を分かちて賑恤せしめ、指す  
こと有らしむ。還りて、京兆尹・刑部侍郎に遷る。劍南東川節度使を拝す。  
……工部尚書・秘書監を歴て、太子少傅を以て致仕す。卒年七十七、尚書  
右僕射を贈らる<sup>\*20</sup>。

嚴耕望氏の考証によると、盧弘宣が工部尚書になったのは宣宗の大中元年の  
ことである<sup>\*21</sup>。大中五年に「劉玄靖碑」を書いたときには、すでに官職を辞  
していた可能性が高い。先に引用した『総勝集』巻中「衡岳観」の条ではこの  
碑を書いた人物を誤って「太子少傅致仕盧璿」としているが、「太子少傅」は  
まさに盧弘宣が引退した際の職名なのである。

## （二）趙櫓「広成先生劉玄靖伝」

趙櫓「広成先生劉玄靖伝」（以下、「劉玄靖伝」と略称する）は、鄭樵の『通  
志』巻六十七「芸文略五」に著録されており、「広成先生劉天師伝」一卷と題  
されている<sup>\*22</sup>。この伝には石刻があり、『宝刻類編』巻五「朱圮」の条では「広  
成先生伝」と著録され、「趙櫓撰、大中七年（853）、潭」とある<sup>\*23</sup>。惜しい  
ことに原文はすでに散逸しているが、2005 年に陳尚君氏が北宋の宰相・晏殊  
が編纂した類書である『類要』から四条の佚文を集めている<sup>\*24</sup>。最近、唐雯

氏が新たにこの貴重な資料を刊行し、この碑に対して要を得た解説をしている<sup>25</sup>。以下にふれる碑文はすべて唐雯氏の録したものである。

この碑を撰した趙櫓には二つの『唐書』に伝がなく、唐雯氏は晩唐の趙麟の『因話録』によって考証を行い、「河東の人であり、趙麟の同族で、盧弘宣・盧簡辞・盧弘正・盧簡求とはいとこ同士、進士に及第し、著作には『郷籍』一篇があり、河東の人物を賞賛した<sup>26</sup>」とする。注目されるのは、盧弘宣と趙櫓の二人がいとこ同士だということである。かたや「劉玄靖碑」の書者、かたや「劉玄靖伝」の撰者であることは明らかに偶然の一致ではなく、彼らは劉玄靖とは深い縁があると考えべきであるが、目下具体的な状況を確認することはできない<sup>27</sup>。書者の朱圮の事績は不明ながら、『宝刻類編』によれば「劉玄靖伝」のほかに六種類の碑を書しており、開成元年（836）の「内侍少監第五従直碑」、会昌三年（843）の「内侍郗士榮碑」、大中五年（851）の「内侍監仇士良碑」、大中九年（855）の「殿中省尚衣奉御蔣洞幽墓誌」なども含まれ<sup>28</sup>、宦官ら宮廷勢力と密接な関係があったようである。

「劉玄靖伝」の全文は現在残っていないが、やはり伝世文献から貴重な手がかりを見つけ出すことができる。『総勝集』巻下の「叙唐宋得道異人高僧」の条には、かなり長文の「劉玄靖伝」があり、詳細に彼の事績を記している。筆者の考えるところでは、この伝記は大部分を唐代の趙櫓の「劉玄靖伝」から直接採録しており、おそらく蕭鄴が撰した「劉玄靖碑」も一部参考にしている。というのも、先に引用した『総勝集』の記載からすると、南宋時代に、陳田夫は銓徳観でこの二つの碑の原石を目睹しているからである。元代の趙道一が『歴世真仙体道通鑑』を編纂した際、その「劉玄靖伝」はさらに簡略化され、ほぼ完全に『総勝集』から抜き書きしてできたものとなっている<sup>29</sup>。現在、『類要』が引用する四条の「劉玄靖伝」の佚文が刊行されたので、この二種の伝記のテキストを比較検討することができるようになったのである（文字が同じものは下線を使って表示する。『類要』そのものの文字についての校勘が三か所あるが、それは表の下欄に記すことにする。

注 21…嚴耕望『唐僕尚丞郎表』巻 21、1058 頁。

注 22…鄭樵『通志』芸文略五。王樹民点校『通志二十略』（中華書局、1995 年、1615 頁）を参照。

注 23…『宝刻類編』巻五、18477 頁。唐雯『晏殊〈類要〉研究』（上海古籍出版社、2012 年、162 頁）では『宝刻叢編』巻五にみえるというが書き間違いであろう。

注 24…『全唐文又再補』巻五（陳尚君『全唐文補編』所収）、2310 頁。

注 25…唐雯『晏殊〈類要〉研究』、162 - 163 頁。

注 26…唐雯『晏殊〈類要〉研究』、162 頁。

注 27…ひとつ考えられるつながりは、趙麟の母である柳黙然の経歴と関連するものかもしれない。「大唐王屋山上清大洞三景女道士柳尊師（黙然）真宮志銘」には「初め正一盟威籙・靈宝法を天台に授かり、また上清三洞畢籙を衡岳に進む」と記されている。彼女は当時有名な女性道士であり、前後して天台山と南岳で法籙を授かっていたので、劉玄靖と知り合いになったのであろう。それによって趙麟も劉玄靖との縁ができた可能性がある。趙櫓や盧弘宣が碑文を書いたり伝を書いたりしているのも、みなこれと関連するのかもしれない。この墓誌は陳垣編、陳智超・曾慶瑛校

補『道家金石略』（文物出版社、1988年、179頁）に録文がある。

注 28…『宝刻類編』巻五、18477頁。

注 29…『歴世真仙体道通鑑』巻四十「劉元靖伝」（『道藏』第5冊）、328 - 329頁。

『類要』所引「劉玄靖伝」	『南岳総勝集』の「劉玄靖伝」
1. 幼師事道士王道宗 [一]、佩盟威籙。 (巻五『総叙道士』所引)	劉元靖、武昌人。師王道宗、傳正一籙。
2. 師事道士王道宗、道宗物化後葬於東山、先生晴霄遠望、見師之墓上有氣、能於太陽景夜不絶、因改葬之。(巻五『道士羽化』所引)	未幾、道宗將告寂、以所有均遺諸門人、元靖惟收圖書。既葬於東山、晴夜有炁出墓中、高十數丈。元靖異之、遂開葬。及發棺、但遺衣被而已。始知其師得道。元靖感悟、泛洞庭、遊武陵、復入南岳、師曰(田)先生。因魏夫人仙壇、乃有十(卜)居意。自壇東尋峻峰上十數里、見一石穴南向、闢以為居。引泉環流、伐木誅茆、前建小閣、基局茶竈、鑿石而成。使君韓曄遊此、命其闕曰會仙。常以百萼醞酒、雖絶粒煉氣、而一飲斗餘。寶曆初、敬宗求方士。監軍呂令琮邀至潭州。先生曰、某有山妻侍妾、以牛肉為命。若以為術士、恐將軍有罔上之名。因請疑肩自剗、以蒜菹而食之。令琮愈疑、因為摩足乞行。先生不得已上道、以十二月一日到京、便召於司(思)政殿。敬宗問以神仙之事、師曰、無利無營、少私寡欲、修身出世之旨也。上不悅而難作。文皇放歸山、李訓欲用董昌齡、自交廣乘傳過岳下、禮先生。先生曰、觀中丞王氣未動、不宜有此行、且徐之。昌齡因緩轡入商山、訓果興乱。朗州刺史唐仲妻病、求符於元靖、遂戒來者曰、此符當示使君、無先於夫人。使還、仲已殂矣。夫人自愈。檣嘗問(聞)先生門人趙中閑曰、先生言董・唐之事如目擊。中閑曰、先生在山中多年。境靜忽忽、有所見、亦無指定之說。

<p>3. 武宗召赴闕、</p> <p>又問金丹之術。先生對以至靈之物、非深山獨往之士不得。上曰、師其得之耶。[二]又對曰、如臣期之得之。今實未有得、得即陛下不可見矣。上賜縑絹百匹及麥飴蜜、止于太清宮。時召入訪問。每有恩賜、先生立捨與監引敕使及諸門、至望仙門、則已空手矣。武宗將授法籙、遂詔入內居靈符殿。</p> <p>事畢、除銀青光祿大夫・崇玄館大學士[三]、賜紫、仍號廣成先生。別立崇玄館、置吏鑄印。先生堅讓不獲、又乞還山。時上亦欲令茅山投龍、遂許。自茅山歸衡岳。(卷五『道士恩遇』所引)</p>	<p>會昌三年、武宗奉玄元之教、將除佛寺、徵先生赴闕。及對見、武宗見神貌清古、改容欽敬、因問、佛法傾烈祖之風、朕欲去之。先生對曰、釋氏久遠、將遏絕、可漸革其弊。卒有變更、即驚衆害事、却不利於道門。又問金丹之術。先生對以至靈之物、非深山獨往之事不可得。上曰、師其得之耶。又對曰、如臣期欲得之。今實未有得、得即陛下不可見矣。上賜縑百疋及米麥飴蜜、止于太清宮。時召入訪道。每有恩賜、先生立捨與監引敕使及諸門、至望仙門、則已空手矣。五年秋、武宗微疾、將傳法籙。內臣以趙歸真有私累、嗜貨財、推先生清淨、可為帝師。遂召入內居靈符殿。武宗問受籙盟信敵血之事、先生對以、至尊最重、莫過於誠敬齋誠(戒)、陛下七日齋・三日戒、自可朝玉帝矣。不合以金玉髮血為信、斷髮敵血、非帝王之事。金玦白璧、非至尊之寶。當時以為中論。及事畢、除銀青光祿大夫・崇玄館大學士、號廣成先生。別築崇玄館以居之。後乞還山、時上亦欲令茅山投龍、遂許。自茅山歸南嶽。</p> <p>武皇大漸、道者許元長・趙歸真輩十餘人皆處極法。上獨詔觀察使存問、賜之束帛・香茗等。</p>
--	---

<p>4. 初九真觀道士周混汗在岳〔四〕、事望亞於先生。朝之未徵先生也、有衡岳道士毛太玄嘗夢真官執籙自天降、云以混汗為大羅觀主。太玄因曰、劉先生曷不先徵乎。真官曰、劉君世業未盡。徵即便為真君、不更為修行人矣。果如其說。先生自朝歸山、歎曰、吾合為地仙數百歲、恨不能早脫身、為二帝所累、今即計不乃矣。蓋敬宗・武宗兩朝並徵赴闕也。(卷五『道士羽化』所引)</p>	<p>初九真觀道士周混汗在岳中、事望亞於先生。朝之未徵先生也。有衡岳觀道士毛太玄嘗夢真官執籙自天降、云以混汗為大羅觀主。太玄因曰、劉先生曷不先徵乎。真官曰、劉君世業未盡。徵則役(便)為仙官、更不為修行人矣。果如其說。先生自朝歸岳、歎曰、吾今(合)為地仙數百年、恨不能脫身、為二帝所累。今以計不乃矣。</p> <p>大中五年冬十月、有雲鶴頻降、未幾去世、聞天樂浮空、及遷神日、惟杖屨在。弟子呂志真亦得其道。</p>
--	--

校勘：

〔一〕「土王」の二字は、唐雯『晏殊《類要》研究』ではもともと「先生」と録文しているが、「幼師事道先生道宗」では意味が通らないので、形が似ていて誤ったものとみなして、文意から修正した。この文章は『類要』が引用する二番目の文章の冒頭がほぼ同じで、「総叙道士」の条と「道士羽化」の条にそれぞれ出てくるから、原文（訳者注：後者の「道士羽化」の文）から再録すべきであろう。

〔二〕唐雯氏はこの条を「上曰、師其得之。師又對曰……」と引用するが、『南岳総勝集』の「劉玄靖伝」では文中二つ目の「師」を「耶」としており、文意も良くなるので改める。

〔三〕「崇玄館」を唐雯氏は「崇玄觀」とする。『旧唐書』卷十八上「武宗本紀」(587頁)、『資治通鑑』卷二四八(8020頁)によって改める。以下の文中の「崇玄觀」も改めることとする。

〔四〕「周混汗」を唐雯氏は「周沌汗」とする。『南岳小録』「凌虚台」の条に「昔有薛天師季昌、周尊師混汗相次居之得道」(864頁)とあり、同書の「唐朝得道人」の条にも「周尊師混汗、会昌二年正月得道」とある(865頁)。『類要』の引用文は、あきらかに字形が近いことによる誤りなので、それらによって改める。以下の文中の「沌汗」も同様に改める。なお、趙璘『因話録』卷四「角部」に「衡山周混沌、蔣之門人也」とあるが(上海古籍出版社、1979年、93頁)、これもまた誤りである。

『類要』が引用する趙櫓の「劉玄靖伝」の四つの佚文と『総勝集』の「劉玄靖伝」を簡単に対照すると、前者の比較的長い第三条と第四条は、後者の字句とほぼ完全に一致することがわかる。さらに重要なのは、後者のテキスト中に「櫓」という文字が見いだせることである。文中に董昌齡と唐伸についての物語をふ

たつ述べたあとに「櫓は嘗て先生の門人趙中閑の曰ふを聞く……」とあるが、間違いなく、この「櫓」とは趙櫓の自称である。この重要な発見と『類要』の第三条と第四条を合わせてみると、『総勝集』の「劉玄靖伝」は大部分が趙櫓の「劉玄靖伝」から直接採録したもので構成されていることをしめす有力な証拠となる。『類要』の第一条と第二条は比較的短い伏文で、『総勝集』のテキストと内容は一致するが文字の出入が大きく、第一条では劉玄靖が「明威籙を佩び」としているのに対し、『総勝集』は「正一の籙を伝え」としているが、両者の説くところは同じであり、ひとしく劉玄靖が王道宗から「正一盟威籙」を授かったことを指している。しかしながら、この文字の異同は、『総勝集』のテキストが主に趙櫓の「劉玄靖伝」に由来しつつも<sup>30</sup>、さらにほかの原典があることを示唆しており、それはおそらくは南宋にまだ伝わっていた蕭艱の「劉玄靖碑」ではないかと思われる。

二つの文章をもとに「劉玄靖伝」を記したとき、陳田夫はおそらく行文の都合によって、語気の移行などの文章の調整を行ったようである。それでは、いかにして両者を区別し、その文章の原典を確認すればよいのであろうか？ 『総勝集』の「劉玄靖伝」では劉玄靖の呼称に「元靖」と「先生」の二種類があることがわかるが、これはもしかすると我々に考える手がかりを提供してくれるかもしれない。つまり、もしその呼称が「先生」であるならば、趙櫓の原文である可能性が高く、「元靖」であるならば、陳田夫の改変によって書き換えられたものかもしれない。もしこの原則が合っているならば、全文中おそらく最初の部分だけが後者の場合に属している。つまり、「宝曆初、敬宗求方士、監軍呂令琮邀至潭州」より後の文は、あるいは趙櫓の「劉玄靖伝」から採録したものかもしれない。むろん、陳田夫がなぜ「元靖」と「先生」の呼称を統一しなかったのかは解釈しがたいが、本文中に趙櫓の自称である「櫓」の字すら残していること、また理屈からしても、その編纂作業はあまり周到ではなかったようである。

## 二、南岳での修行から最初の宮廷入りまで

上述したように、『南岳総勝集』の「劉玄靖伝」は唐代の張櫓「劉玄靖伝」を原典としているので、我々は安心して『総勝集』のテキストを基礎にその他の文献を総合し、晩唐道教の大道士の事績を素描することができる。各種の資料はみな彼の死去した年齢を記さないで、その生年を推定する術がない。ただ彼が武昌の人であり、最初の師は王道宗だということだけが知られる。後者について、我々はほぼ何もわからないが、劉玄靖は正一盟威籙を伝授され、正式な修行の第一段階を完成させた。しかし王道宗はまもなく世を去ってしまった。彼が葬られた「東山」は、武昌にあるのかもしれない。劉玄靖はある

注 30…現存する『類要』には善本が少なく、文字の間違いもきわめて多いため、個別の字句に出入があるのはさけられない。しかも、類書である『類要』はちがう項目で書物を引用する際に、少々微調整をしている可能性がある。むろん、『類要』の本文も利点がないというわけではない。たとえば表中の四番目の引用文中の「微即便為真君」という箇所「便」、「吾合為地仙數百歲」という箇所の「合」の字は、『総勝集』の「劉玄靖伝」ではそれぞれ誤って「役」と「今」となっており、『類要』の引用文によって校勘することができる。

晴れた夜に師の墓から気が十数丈（訳者注：35～40メートルぐらい）もたちこめているのに気づき、その改葬の際になって、ようやく師がすでに得道していたことを知ったのである。「劉玄靖伝」におけるこの場面の描写は表向き王道宗の奇跡を称揚しているように見えるが、実際には伝記の主人公を神格化するためのものである。というのも、まず師が得道して昇仙したことにより、道士としての出自が非凡であることを示している。また、王道宗には多くの門人がいたのに、劉玄靖だけが気を観察する能力があり、それゆえに師が得道したことが分かったのである。高名な道士の伝記として、この話の運び方は戦略的であり、伝記の主人公が昇仙得道する素質を持っていることをしめすのに成功しているのは間違いない。

王道宗の得道に悟るところがあり、劉玄靖はほかの唐代の高位の道士たちと同じく、名山大川を遊歴し、得道した真人を探訪する求法の旅を始めた。彼は「洞庭に泛び、武陵に遊び、」最終的に南岳で二番目の師であり、中晩唐期に上清経籙の伝承者として天下に名をとどろかせていた田虚応にめぐり会った。比較的早くその事績を記録した晩唐・杜光庭の『洞玄靈宝三師記』には、おおよそ以下のように記されている。

経師の南岳上清大洞田君、諱は虚応、字は良逸、齐国の人なり。……唐の龍朔年中、隠仙何君と相ひ遇ひ、黙してその道を伝ふ。此れ自り煙蘿泉石にあり、止まる所にて帰るを忘る。……授かる所の上清大洞は、貞一先生自り天師薛君に伝はり、薛君は以て先生に伝ふ。先生は纘（つ）いで玄要を承け、深く道域に臻り、涉歴して雲水すること二百余年。……先生の門弟子の達する者は四人。栖瑤の馮君惟良、香林の陳君寡言、方瀛の徐君靈府、元和中、東のかた天台山に入り、方に随ひて教へを宣べ、憲宗皇帝の詔して徴（め）すも起（た）たず。広成先生劉君は猶ほ岳下に居るも、武宗皇帝の徴して天師と為さば、国に入りて道を伝ふ。今の江浙の三洞の法、先生田君を以て祖師と為す<sup>\*31</sup>。

この書の表題には「広成先生劉處静撰」とあるが、卿希泰主編の『中国道教史』第二巻ではつとにその誤りを指摘し、この書の作者は晩唐五代の道教の大家である広成先生杜光庭とすべきだとしている。また同時に、「実際に唐の武宗に広成先生の称号を授かったのは陳寡言と同門の劉元靖であり、陳寡言の弟子である劉處静ではない」とする<sup>\*32</sup>。この判断は正確であり、『洞玄靈宝三師記』に登場する「広成先生劉君」とは劉玄靖を指しており、杜光庭の追記において、劉玄靖はその祖師馮惟良と同じく、田虚応の四大弟子の一人として挙げられている<sup>\*33</sup>。

李冲昭の『南岳小録』には多くの田虚応に関する史跡が記されており、衡岳

注 31…『道蔵』第6冊、751頁。趙璘『因話録』卷四「角部」には田良逸にまつわる記事が多く載せられており、『洞玄靈宝三師記』と対照することができる（92 - 93頁）。

注 32…卿希泰主編：『中国道教史』第2巻、410頁、注釈3。

注 33…小林正美氏は『洞玄靈宝三師記』を利用して晩唐における上清経籙の伝授の系譜について論じているが、先に引用した「田虚応伝」にみえる「広成先生劉君は猶ほ岳下に居るも、武宗皇帝の徴して天師と為さば、国に入り道を伝ふ」という文を誤解して、武宗が天師にしたのは田虚応であり、さらには「先生の門弟子の達する者四人」を「三人」の誤りだとしているが（同氏『唐代の道教と天師道』第三章第三節『洞玄靈宝三師記』における上清大法の伝授の系譜、知泉書館、2003年、147 - 151頁）、これはあきらかに史料を誤読したものである。

観の「田先生得道降真堂」や、「田先生藥岩」などがあり、「唐朝得道人」の条には、

田先生良逸、元和六年正月七日 降真院に在りて得道す。広成劉先生玄静、大中五年五月十一日得道す。……田先生に弟子の陳微君、馮微君、張（徐）微君三人有るも、徴されるに就かず、みな天台山に於いて相ひ次いで得道す<sup>34</sup>。

と明確に記されている。学界の研究によれば、中晩唐から五代にかけて、道派の法系が最も明らかなのは茅山派とそこから派生した南岳天台派であり、後者の系譜は、司馬承禎が南岳で薛季昌に伝え、薛季昌は田虚応に伝え、田虚応は馮惟良・陳寡言・徐靈府・劉玄靖の四人に伝えたというものである。馮惟良の入室の弟子である応夷節は杜光庭の師であり、これも杜光庭が『洞玄靈宝三師記』を著した原因となっている<sup>35</sup>。田虚応の四大弟子のうち、馮惟良などの三人は師に従って元和年間に東方の天台山に入り、修道・伝法した。劉玄靖だけが衡山に留まったため、南岳では彼に関する記載が増えたのである。たとえば衡岳観には田虚応の「降真堂」のほか、さらに「劉天師の真堂」があり、まさにそこで劉玄靖が田虚応にしたがって修行したことがわかる。そのため、衡岳観には田虚応の「隱真崑田先生記」と劉玄靖の「神道碑」、そして趙櫓の「劉玄靖伝」の石刻が残されていたのであろう。

敬宗の宝暦年間になると、劉玄靖は一度召されて長安に入ったが、この皇帝とは縁がなかったようである。『総勝集』の「劉玄靖伝」には、以下のように記されている。

宝暦初、敬宗は方士を求め、監軍の呂令琮は邀へて潭州に至る。先生曰く、某に山妻侍妾有り、牛肉を以て命を為す。若し以て術士と為さば、恐らくは將軍に上を罔ふるの名有らん。困りて餓の肩を請ひ自ら割（き）り、蒜菹を以てして之を食す。令琮いよいよ疑ひ、困りて為に足を摩して行くを乞ふ。先生已むを得ずして上道し、十二月一日をもって京に到り、便ち司政殿に召さる。敬宗は問ふに神仙の事を以てするも、師曰く、利すること無く営むこと無く、私を少なくし欲を寡なくするは、修身出世の旨なりと。上悦ばざるも難作（お）こり、文皇は放ちて山に帰す。

敬宗が方士を求めたことについては史書に、宝暦元年（825）八月、

戊午、中使を遣はして湖南・江南等の道および天台山に往かせ、採藥せしむ。時に道士劉從政なる者有り、説くに長生久視の道を以てし、天下に異

注 34…『南岳小録』（『道蔵』第6冊）、865 - 866頁。

注 35…南岳天台派の概要については、卿希泰主編『中国道教史』第2巻（406 - 412頁）を参照。また以下の文献も参考になる。陳国符『道蔵源流考』の「道経伝授表」（中華書局、1992年、第29 - 30頁）：James Robson, *Power of Place: The Religious Landscape of the Southern Sacred Peak (Nanyue 南嶽) in Medieval China*, pp.167-173.

注 36…『旧唐書』卷十七上「敬宗本紀」、516頁。

注 37…『旧唐書』卷十七上「敬宗本紀」、520 頁。

注 38…『旧唐書』卷十七上「敬宗本紀」、518 頁。

注 39…「葉静能」は「葉浄能」と記される時もあり、イギリス所蔵の敦煌文書スタイン 6836 号「葉浄能詩」には、彼にまつわる不思議な物語が多く収められている。金栄華「読「葉浄能詩」札記」（『敦煌学（台北）』第 8 輯、1984 年、27 - 46 頁）を参照。

注 40…羅公遠に関しては以下の文献を参照。遊佐昇「羅公遠と民間信仰」（秋月観嘆編『道教と宗教文化』、平河出版社、1987 年、245 - 263 頁）；Franciscus Verellen, “Luo Gongyuan: Légende et Culte D'un Saint Taoïste”, *Journal Asiatique*, vol. 275 (1987), pp.283-332. 凍国棟「唐代道士羅公遠及其靈驗伝説一読『道教靈驗記』札記之一」（武漢大学中国三至九世紀研究所編『魏晉南北朝隋唐史資料』第 19 輯、2002 年、92 - 98 頁。）

注 41…唐代道士に妻子がいるという状況は普遍的にみられるもので、劉玄靖とほぼ同時代の高名な道士である鄧延康には三人の子がいた。拙稿「碑誌所見の麻姑山鄧氏——一箇唐代道教世家的初歩考察——」（『唐研究』第 17 卷、北京大学出版社、2011 年、39 - 70 頁）を参照。

人を求訪するを請ひ、靈藥を獲るを冀ふ。仍って従政を以て光祿少卿となし、昇玄先生と号す<sup>\*36</sup>。

と記載されている。この敬宗の要求に対して、各地の官員たちは急いで行動しはじめ、宝暦二年(826)五月には、「浙西は絶粒せし女道士の施子微を送り到る。……癸未、山人の杜景先は光順門において状を進め、道術有り」と称す。中使をして杜景先を押して淮南および江南・湖南・嶺南の諸州に異人を求め訪ねしむ<sup>\*37</sup>。」という事態となった。

明らかに湖南はこのときに異人を探訪するための重要な場所のひとつであった。この年の春正月辛未、湖南觀察使の沈伝師は「詔を奉り葉靖能・羅光遠の文案を校尋するも、檢尋するを獲ず」と上奏している<sup>\*38</sup>。この「葉靖能」は中宗時代の道士「葉静能」の<sup>\*39</sup>、「羅光遠」は玄宗時代の道士「羅公遠」<sup>\*40</sup>の誤りかと思われるが、これより前に敬宗は特別に湖南の官府に命令を出して、この符籙と法術に長けた盛唐時代の伝説的な道士ふたりの公文書を調べさせたことが分かる。その結果、何も得るところがなかった湖南方面への圧力は推して知るべしであろう。そのため、監軍使の呂令琮は劉玄靖を当地の異人・高士として朝廷に推挙することを願ったのである。元和中、田虚応はもう馮惟良などの高弟を率いて東方の天台山に行ってしまったので、「猶ほ岳下に在」った劉玄靖が衡山で最も名望のある道士となり、地方政府が敬宗の要求にこたえるのに最適な人物になったのである。しかしながら、劉玄靖は長安に行くことに懸念があったのか、さまざまな理由をつけて固辞している。自らには妻や妾と家族がおり<sup>\*41</sup>、牛肉を食べるのを好み、けっして適格な術士ではないと主張した。それを証明するために、かれは面前で豚肉を切り分け、ニンニクの漬物を添え物にしたのである。しかし、監軍使の呂令琮に懇願され、最終的に都に行くことを承諾してしまった。

宝暦二年十二月一日、劉玄靖は敬宗に拝謁したが、二人の話はかみ合わなかった。敬宗は神仙になる修行のことを聞きたいと思ったが、劉玄靖は「利すること無く営すること無く、私を少なくし欲を寡なくするは、修身出世の旨なり」といって清心寡欲の考えを勧めた。ポロに熱中し、夜通し宴会をする十八歳の青年皇帝にとって、耳の痛い話だったに間違いあるまい。劉玄靖の答え方は、百年あまり前の司馬承禎が睿宗に答えた言葉を思い起こさせるものであった。「道経の旨は、道を為せば日々損し、之を損してまた損す、以て無為に至るなり。且つ心目の知見する所の者は、毎に之を損して尚ほ已む能はず、豈に復た異端を攻め、其の智慮を増さんか。<sup>\*42</sup>」同じような場面は玄宗と呉筠にも存在した。「又た神仙修煉の事を問ふに、対へて曰く、此れ野人の事にして、まさに歲月功行を以てこれを求むれば、人主のよろしく意に適ふ所に非ざるなり<sup>\*43</sup>。」あきらかに劉玄靖と司馬承禎や呉筠の思想には一脈通ずるものがあるが、残念な

ことに暗愚な敬宗には睿宗や玄宗ほどの修養や気概はなかったのである。

この不愉快な面会について、『総勝集』の「劉玄靖伝」は「上悦ばざるも難作（お）こる」とある。「難作こる」とは七日後に敬宗が宦官の劉克明や蘇佐明らに弑殺されたことを指している。新しく即位した文宗皇帝は敬宗をそそのかした僧や道士に対してただちに厳格な処罰を行った。「甲辰、僧惟真・齊賢・正簡、道士趙歸真、並びに嶺南に配流さる。……道士紀處玄・楊冲虚、伎術人李元戡・王信ら、並びに嶺南に配流さる。」ということになった。庚申、また詔があり、「妖妄なる僧惟貞・道士趙歸真ら、或いは卜筮に仮り、或いは医方に托り、衆を疑ひ邪を挟み、已に流竄に従う。その情は非にして奸悪なるも、跡に涉り誣誤せられし者は、一切問はず<sup>44</sup>。」とされた。趙歸真らが首魁なのは明確であり、湖南からはるばるやって来たばかりで数日しか都にいなかった劉玄靖は巻き添えにならず、ただ南岳に帰されただけであった。

### 三、会昌の廃仏中の劉玄靖

文宗によって南嶽に帰らされてから、劉玄靖は石室隱真宮で十五年あまりをすごし、武宗皇帝にふたたび長安に召し出された<sup>45</sup>。会昌年間、劉玄靖の声望と地位は頂点に達していたが、その入京と任官・賜号の年代、そして会昌の廃仏ではたした役割などについては、各種の史料に多くの矛盾点がある。例えば、『旧唐書』の武宗本紀には、会昌元年六月、「衡山の道士劉玄靖を以て銀青光祿大夫と為し、崇玄館学士に充て、広成先生と賜号し、道士趙歸真と禁中に於いて法籙を修めしむ。左補闕の劉彦謨は上疏して切に諫むも、彦謨を貶して河南府の戸曹と為す<sup>46</sup>」とある。一方、『資治通鑑』では「上 道士趙歸真らに命じて三殿に於いて九天道場を建て、親ら法籙を授かる。右拾遺の王哲は上疏して切に諫むも、坐して河南府の土曹に貶さる」とされ、まったく劉玄靖にふれていない。さらに、司馬光は『考異』において『旧紀』の記載について反駁している<sup>47</sup>。劉玄靖の任官と賜号の年代についても『通鑑』では会昌五年(845)十月のこととしている<sup>48</sup>。

これは『通鑑』の記述の方が正確だと考えられる。『総勝集』の「劉玄靖伝」は、武宗に召し出されて都に行ったのが会昌三年(843)で、官位を授かり賜号されたのは武宗が授籙したあとの会昌五年秋のことだと明確に記している。『唐会要』には、「(会昌)二年十一月、道士趙歸真を以て道門兩街都教授博士と為す(原注:時に武宗は神仙を学ぶを志し、歸真は間に乗じて釈氏を排毀し、中国の教に非ず、宜しく尽く之を去るべしと言へり。帝は之を然りとし、乃ち天下の僧尼を澄汰す<sup>49</sup>。)」とある。『総勝集』の「劉玄靖伝」は「会昌三年、武宗は玄元の教えを奉り、まさに仏寺を除かんとするに、先生を徴して闕に赴かしむ」と記す。以上により、趙歸真が武宗に廃仏を勧めたのは会昌二年十一月

注 42…『旧唐書』卷一九二「隱逸」司馬承禎伝、5127 - 5128 頁。

注 43…『旧唐書』卷一九二「隱逸」吳筠伝、5129 頁。

注 44…『旧唐書』卷十七上「文宗本紀上」、523 - 524 頁。

注 45…『南岳小録』「石室隱真宮」の条には、劉玄靖が武宗に召し出されるまで「茲に在りて十五年余り修道」したと記されている。

注 46…『旧唐書』卷十八上「武宗本紀」、587 頁。

注 47…『資治通鑑』卷二四六、唐武宗会昌元年六月(中華書局、1956年、7952頁。)

注 48…『資治通鑑』卷二四八、唐武宗会昌五年十月、8020頁。野口鉄郎・石田憲司編「道教年表」では、この二つの年代について判断を示さず、それぞれ会昌元年と会昌五年にこの出来事を繫年している(ただし前者は「劉玄靖」、後者は「劉元靖」とする)が、これは明らかに不正確である。福井康順・山崎宏・木村英一・酒井忠夫監修『道教』第3巻(平河出版社、1983年、345 - 346頁)を参照。

注 49…『唐会要』卷五十「尊崇道教」、1017頁。

注 50…以下の文献を参照。  
丁煌「唐代道教太清宮制度考」(同氏『漢唐道教論集』所収。中華書局、2009年、73 - 156頁): Victor Xiong, "Ritual Innovations and Taoism under Tang Xuanzong." T'oung Pao, vol. 82(1996), pp. 258-316.

注 51…拙稿「碑志所見の麻姑山鄧氏——簡唐道教世家的初步考察——」(56頁)を参照。

注 52…錢易著・黃壽成点校『南部新書』卷己(中華書局、2002年)、87頁。

注 53…『旧唐書』卷十八上「武宗本紀」、603頁。

であること、劉玄靖は翌年に召されて京師に赴き、太清宮に配属されたことがわかる。皇帝の家廟という性質をもった道観として、太清宮は中唐以後の国家祭祀と長安の宮観のシステムにおいて中心的な位置を占めていた<sup>50</sup>。詔によって京師に入った高名な道士たちは往々にして太清宮に配属され居所としており、たとえば文宗の太和八年(834)、麻姑山の高名な道士である鄧延康も詔によって入京した当初、「籍は太清宮に隸し」ていた<sup>51</sup>。

それでは、武宗はなぜ劉玄靖を南嶽から招いたのであろうか? 『南嶽小録』には不思議な伝説が記されており、

時に太史の之を占ひ、真人星の見れる有り、隱者は茲の岳に在りて得道し、天文に應ずと云ふに因りて、武宗に上聞す。武宗は遽かに詔命を降し、本道の監軍使に委ね、人を遣りて詔を賚(たま)ひ徴召せしむ。

とある。しかし、真の原因は趙歸真の建議によるものかもしれない。というのも、両者は十数年前、敬宗が弑殺されるまでの数日間で、一度くらいは会う機会があったかもしれないからである。後世の人には、武宗の廃仏政策はこの二人が焚きつけたものと受け止められている。たとえば、『南部新書』には、

会昌末、頗る神仙を好む。道士趙歸真の禁中に入出する有りて、自ら数百年と言ひ、上のこれを敬ふこと神の如く、道士劉玄静と力めて釈氏を排す。武宗は既に其の説に感ひ、終に沙汰の事を行ふ<sup>52</sup>。

という。『旧唐書』の武宗本紀では、

(会昌五年)正月己酉朔、勅して南郊の壇に望仙台を造らしむ。時に道士趙歸真特に恩礼を承くるも、諫官は上疏し、之を延英に論ず。……歸真自ら以って物論に涉り、遂に羅浮の道士鄧元起の長年の術有るを挙げ、帝は中使を遣わしこれを迎ふ。これより衡山の道士劉玄靖および歸真と膠固となり、釈氏を排毀し、拆寺の請行はる<sup>53</sup>。

としている。これも劉玄靖は趙歸真や鄧元起と同じく、仏教の排斥につとめ、武宗の廃仏政策を煽り立てたというのである。

しかし、『総勝集』の「劉玄靖伝」の記述はことなっており、劉玄靖は入京したのち、武宗に廃仏に対する考えを諮問された際、劉玄靖は「釈氏は久遠なれば、まさに退絶せんとすれば、漸く其の弊を革むべし。卒に変更有らば、即ち衆を驚かせ事を害なひ、却って道門に利あらざるなり」と答えたという。唐突で大規模な廃仏はかえって道教に利益がなく、長期的な計画を立ててゆっく

りと推進する必要があると考えていたというのである。このような態度は趙帰真よりもはるかに穏健であり、より理性的である。その後の宣宗の劉玄靖に対する態度からして、これがより実情に合っているようである。実際に、自ら廃仏を経験した日本の僧侶・円仁は『入唐求法巡礼行記』において、趙帰真を非難しているが、劉玄靖については一言もふれていない。当時の人々には、劉玄靖はけっして廃仏の推進役とはみなされていなかったことが分かる。しかし、会昌五年七月に廃仏政策が推し進められた時、劉玄靖はけっきょく長安にいて武宗に尊崇されており、廃仏のことに巻き込まれずにはいらなかったのである。

劉玄靖が会昌年間に最高の地位にあった主な原因は、武宗が道教に入門した際に法籙を授けた度師だったからである。『総勝集』の「劉玄靖伝」には以下のような詳細な記述がある。

五年（845）秋、武宗に微疾あり、將に法籙を伝へんとす。内臣は趙帰真に私累有り、貨財を嗜むを以て、先生は清浄にして、帝師と為す可しと推せり。遂に召されて内に入り靈符殿に居る。……事の畢るに及び、銀青光祿大夫・崇玄館大学士に除し、広成先生と号す。別に崇玄館を築き以て之に居らしむ。

会昌年間、宮廷道士の中で趙帰真はまぎれもなく真に中心的な存在であったが、それゆえに朝野の輿論に特に非難される対象となり、本人もそれは明確に分かっていた。そのため、五年の正月に羅浮山から来た鄧元起を都に迎え、いっしょになって武宗を感化していったのである。しかしながら、「内臣」、つまりは宮廷内を取り仕切っていた宦官も趙帰真について不満を持っており、「私累有り、貨財を嗜む」人物とみなしていた。そのため、彼によって武宗の入道と受籙の儀式が行われるのを願わなかった。一方で劉玄靖のことは「清浄にして帝師と為すべし」と考え、表舞台に引っ張り出した。道教内部における地位からしても、当時の南岳天台派は高名な道士を輩出して隠然と天下の上清経籙の正統となっており、その宗師である田虚応の高弟でもあったので、劉玄靖自身も十分な資格と声望をもってこの重責を担ったのである<sup>54</sup>。この点では、師承関係がはっきりしない趙帰真とは比べ物にならなかった。

武宗が受籙したのは具体的には会昌五年十月であった。『唐会要』は「其の年十月、勅して道門の法籙を伝度し、衡岳の道士劉玄靖を以て銀青光祿大夫を加え、崇玄館学士に充つ可しとし、仍って広成先生と賜号す<sup>55</sup>」としており、『資治通鑑』が記す劉玄靖の任官と賜号のタイミングと一致している。なお、劉玄靖が武宗の受籙の度師になったほか、当時名高かったもうひとりの大物道士—当時七十二歳の「麻姑仙師」鄧延康—もこの儀式の「監度師」に就任したこと

注 54…もちろん、もし茅山の弟子の立場からすれば、状況はちがってくるであろう。砂山稔氏は李徳裕が著作中で劉玄靖に言及していないのは、李徳裕が茅山の宗師である孫智清について学んだため、劉玄靖を上清派の傍系としかとらえていなかったと指摘している。同氏『隋唐道教思想史研究』第十章「李徳裕と道教」（平河出版社、1990年、412頁）を参照。

注 55…『唐会要』巻五十「尊崇道教」、1017頁。

注 56…鄭畋「唐故上都龍興觀三洞經籙賜紫法師鄧先生墓誌銘」（『全唐文』巻七六七、中華書局、1983年、7981頁。）拙稿「碑志所見的麻姑山鄧氏—一箇唐代道教世家的初歩考察—」（54—62頁）を参照。

にもふれておくべきであろう<sup>\*56</sup>。武宗に法籙を授けたふたりの道士は、明らかに当時最高の人材であった。

劉玄靖に関する各種の史料を仔細に分析してみると、中晩唐の政治史において重要な立場にあった宦官勢力との関係も並々ならぬものであったことがわかる。もしかするとこれが彼が山林道士から一躍武宗の帝師になった主な要因なのかもしれない。劉玄靖が敬宗朝のころに初めて宮廷に入ったのは、湖南監軍使の呂令琮の推薦によるものであった。武宗が再度下山を依頼した際も、やはり「本道の監軍使に委ねて人を遣りて詔を賚(たま)ひ徴召」したのであった。注目すべきは、趙櫓の「劉玄靖伝」では「恩賜の有るごとに、先生はたちどころに舍して監引の敕使および諸門に与へ、望仙門に至らば、則ち已に空手なり」としていることである。この手の記述はおもに伝記の主人公が清虚恬淡であり、財貨に執着しない品格があったことを強調するためのものであるが、武宗の賜ったものをすべて宦官と大明宮の諸門の主守官にあたえてしまったというのは、「私累有り、貨財を嗜む」とされた趙歸真とは明らかに対照的であり、劉玄靖に内廷勢力の歓心を得させたのは間違いあるまい。会昌五年に武宗が受籙するにあたって、主事の「内臣」たちは趙歸真を捨て、劉玄靖に皇帝の度師をさせることに決定したのであろう。先に引用した蕭鄴の「劉玄靖碑」には「武宗朝の権を擅にする者は、神仙を以て睿思を絆がんと欲し、しばしば天下の術士を致すべし、不死の薬を求むべしと言ひ、乃ち先生を召すことを命ず」とあった。「武宗朝の権を擅にする者」とはふつう李徳裕を指しているが、宦官が真の黒幕なのかもしれない。というのも、劉玄靖と李徳裕に交流があった痕跡を発見できないからである。ほかに、劉玄靖の没後、趙櫓の「劉玄靖伝」を書いた朱玘も注目に値する。彼は仇土良や第五従直ら宦官の神道碑の書者であり、そのような人物が書写した「劉玄靖伝」は、別の側面から劉玄靖と宦官の密接な関係を反映したものとといえる。

注 57…『旧唐書』卷十八下「宣宗本紀」、615頁。

注 58…『宋本冊府元龜』卷一五三「帝王部・明罰二」、294頁。

注 59…『南部新書』卷己、87頁。

注 60…たとえば野口鉄郎・石田憲司編「道教年表」は会昌六年の条に趙歸真と劉玄靖が誅殺されたと記載している(福井康順など監修『道教』第3巻、346頁。)唐雯『晏殊〈類要〉研究』もこの説をとる(163頁。)

#### 四、劉玄靖の結末：誅されたのか得道したのか？

不運なことに、廃仏政策が実行された翌年の会昌六年(846)三月甲子、武宗が崩御してしまった。新しく即位した宣宗はただちに会昌年間の政策に対して反動的になり、ついには廃仏政策を終わらせ、関係者を一掃しだした。『旧唐書』宣宗本紀には、その年の五月、「道士劉玄靖ら十二人を誅す。その説の武宗を惑わし、釈氏を排毀するを以ての故なり<sup>\*57</sup>」とある。『冊府元龜』も「宣宗は会昌六年に即位し、五月、詔して道士劉玄靖および山人ら十二人を誅す。時に帝以ふに玄靖らは会昌中より左道を以て禁中に入出し、武宗を惑はずに留年の術を以てするが故なり<sup>\*58</sup>」という。『南部新書』には「宣帝の即位するに及び、歸真を南海に流し、玄靖は市に戮さる<sup>\*59</sup>」とある。これらの史料はす

べて、劉玄靖はこの皇帝の更迭劇の際に処刑されたとしており、現代の研究者たちにもこれらの記事を信じて疑わない者がいる<sup>60</sup>。しかし、『資治通鑑』の記載によれば、劉玄靖は武宗に授籙したのち、すぐに「山に還るを乞い、これを許<sup>61</sup>」されたという。宣宗が即位したのちに誅された者についても、『資治通鑑』には、会昌六年四月、「道士趙歸真ら数人を杖殺し、羅浮の山人軒轅集を嶺南に流す<sup>62</sup>」とあり、劉玄靖には一言もふれない。

それでは、事実はいかかなるものであろうか？ 沈曾植はかつて蕭鄴撰・盧弘宣書の「劉玄靖碑」を分析して以下のように言っている。「玄靖が官を辞して山に帰ったのは、災いを避ける術があったかのようだ。……玄靖は（衡）山にあって、観察使が其の道行を重んじ、上奏して皇帝の許しを求めたことも知られていない。そうでなければ（会昌）元年に死刑にされて、五年に碑を建てたことになる。蕭鄴や盧宏宣はともに頭官であり、そのようないい加減なことをするだろうか？<sup>63</sup>」これは非常に見識のある意見である。いま趙櫓の「劉玄靖伝」によって、この問題について検討を続けることにしよう。『類要』の引用文のうち第三条には明確な記載があり、武宗に法籙を授けたのち、対面して褒賞を受けたが、「先生は堅く譲りて獲らず、また山に還るを乞ふ。時に上はまた茅山に投龍せしめんと欲し、遂に許す。茅山より衡岳に帰」ったという。『総勝集』の「劉玄靖伝」ではそのあとに「武皇大いに漸（すす）み、道者の許元長・趙歸真の輩十余人はみな極法に処さる。上はひとり観察使に詔して存問し、これに束帛・香茗などを賜ふ」と続く。あきらかに、劉玄靖は茅山から南岳に帰ったという記載は信頼すべきであろう。

沈曾植は『劇談録』の記事によって、許元長と趙歸真は宣宗が誅殺する予定の十二人のうちに入っていたが、刑の執行はされなかったと考えている。しかし、「劉玄靖伝」の記載からすると、当時、宣宗はたしかに趙歸真や許元長らの道士を死刑にしており、早くに南岳に戻っていた劉玄靖はその中に入っておらず<sup>64</sup>、宣宗はさらに湖南観察使を派遣し、贈り物をもって衡山に行かせて慰撫している。これは劉玄靖の道教内部における地位とその「清浄」な処世術と関係する一方で、劉玄靖が反仏教的な態度を激しくしめさなかったことと関係があるかもしれない。宣宗が即位したのち、大いに仏教を復興したが、それによって道教を排斥したりはしなかった。とりわけ武宗に法籙を授けたふたりの大物道士である劉玄靖と鄧延康には、十分に敬意を払っていた。

それだけにはとどまらず、『唐会要』によれば、「其の年（会昌六年）九月、衡岳道士・賜紫・劉玄靖は『皇帝の十月十五日に三洞の法籙を授かるに、請ふらくは屠釣を禁断し、百司の死刑を決せざらんことを。伏して宣下するを請ふ』と奏す。勅旨もてこれに従う。十月十一日より十八日に至るまで禁断す<sup>65</sup>』という。『資治通鑑』にも、同年十月「甲申、上（宣宗）三洞の法籙を衡山の道士劉玄静より受く<sup>66</sup>」とある。これらを考え合わせると、宣宗皇帝は即位

注 61…『資治通鑑』卷二四八、唐武宗会昌五年十月、8020 頁。

注 62…『資治通鑑』卷二四八、唐武宗会昌五年十月、8024 頁。

注 63…沈曾植『海日樓札叢』卷六「広成先生劉玄靖神道碑」の条、256-257 頁。

注 64…バレット教授はこれによって、生涯を通して修行に精勤であった道士の劉玄靖と、宗教によってチャンスをうかがった成り上がり者である趙歸真を朝廷は明確に区別していたと考えている。T. H. Barrett, Taoism under the T'ang: Religion & Empire during the Golden Age of Chinese History, p.90.

注 65…『唐会要』卷五十「尊崇道教」、1018 頁。

注 66…『資治通鑑』卷二四八、会昌六年十月甲申、8028 頁。

した年に武宗にならって劉玄靖から三洞の法籙を授かったこと、さらには劉玄靖の要請にしたがってわざわざ詔を出して屠殺を八日間禁じ、官府には死刑の判決を出さないようにさせたことが確認できる。この点について、胡三省は注釈で「既に趙鼎真を杖殺し、復た法籙を受くるは、所謂の尤あるもこれに效ふなり」という。問題は、当時南岳にいた劉玄靖がいかにして宣宗に法籙を授けたのかという点である。ロブソン氏は、劉玄靖が短期的に長安にもどったと考えているが<sup>\*67</sup>、いかなる資料でもそれを証明することはできない。趙櫓の「劉玄靖伝」によれば、劉玄靖はかつて自ら「二帝の累はす所となり」、すぐに昇仙を成就することができなかつたと語ったという。「蓋し敬宗・武宗兩朝ならびに徴して闕に赴かしむるなり」とあるが、宣宗の時に再び入朝したという証拠は全く見出すことができない。実際には、劉玄靖が宣宗に法籙を授けたのは「遥授」に属するものであり、唐代道教史上では決してめづらしいものではない。顔真卿の「茅山玄靖先生広陵李君碑銘並びに序」によれば、天宝七年(749)三月十八日、上清経籙の宗師である李含光が「度師」として茅山にいながら玄宗に三洞の法籙を「遥授」したという<sup>\*68</sup>。劉玄靖が衡山に身を置きながら宣宗に法籙を授けたのも、まさに前例を踏襲したものだだったのである。

劉玄靖が処刑されず、しかもすぐに宣宗の師となり、恩寵を受けたのであれば、『旧唐書』宣宗本紀や『冊府元龜』の記述は何にもとづいているのであろうか? 『旧唐書』の本紀は、武宗以前の部分の多くは国史と実録によっているが、もともと三十巻本だった『武宗実録』は五代になると一巻しか残存しておらず、「宣宗本紀」を編纂するときには実録や国史などは参考にできなかったので<sup>\*69</sup>、誤りや見落としがあるのも理解できる。宣宗が即位した当初、劉玄靖や趙鼎真ら十二人を誅殺する詔書はたしかに出されたのであろう。しかし劉玄靖は当時長安に居らず、宣宗はすぐに彼は趙鼎真などの輩とはちがうと考え、最終的には赦免したのである。ひとたび災難をやりすごすと、劉玄靖は早々に宣宗に法籙を授ける度師となってしまった。この過程において、内廷の宦官がどのような働きをしたのかはもはや考証しようがないが、それ以前に劉玄靖と宦官が良好な関係を保っていたことを考えるとその可能性はある。上述の『旧唐書』と『冊府元龜』の記述については、おそらく最初の詔勅だけによったものと思われる。

五年後、劉玄靖は衡山で仙去した。『南岳小録』「唐朝得道人」の条には「広成劉先生玄静、大中五年五月十一日得道す。周尊師混汗、会昌二年正月得道す<sup>\*70</sup>」とある。趙櫓「劉玄靖伝」には、このことについて神話化して記されている。

初め九真觀の道士周混汗の岳に在り、事望は先生に垂ぐ。朝のいまだ先生を徴さざるに、衡岳道士の毛太玄有りて嘗て真官の籙を執りて天より降り、混汗を以て大羅觀の主と為すと云ふを夢む。太玄因りて曰く、劉先生は曷

注 67…James Robson, Power of Place: The Religious Landscape of the Southern Sacred Peak (Nanyue 南嶽) in Medieval China, p.175.

注 68…『道家金石略』、160頁。

注 69…黄永『唐史史料学』(上海書店出版社、2002年、9頁)を参照。

注 70…『南岳総勝集』の「劉玄靖伝」では、彼が死去したのは十月のこととしており、『南岳小録』が五月十一日としているのとなつてゐる。両者のいずれが正しいかは判断がつかぬので、今後の課題としたい。

ぞ先に徴されざるかと。真官曰く、劉君の世業は未だ尽きず、徴されるれば即ち真君と為り、更に修行する人と為らず、と。果たして其の説の如し。先生朝より山に帰り、歎じて曰く、吾れまさに地仙に為ること数百歳になるべくも、恨むらくは早に脱身する能はず、二帝の累はす所と為り、今即ち計及ばず、と。蓋し敬宗・武宗の兩朝ならびに徴して闕に赴かしむればなり。

趙璘の『因話録』によると、周混汗は田虚応の親友である蔣含弘の弟子であり、「周は幼きより入道し、科法は清嚴にして、いま南岳の首冠たり<sup>71</sup>」という。すなわち劉玄靖と同輩であり、ともに南岳道教を代表する人物であった。さらに、劉玄靖が「二帝の累はす所と為る」と言っていることからすると、彼にとっては敬宗と武宗の兩朝から招かれ宮廷に赴くのは煩わしく、すぐに昇仙するのをさまたげるものであったようである。これは晩年に至り、幾多の政治的な波乱を経験した後での、自らの生涯についての反省であったかもしれない。結局のところ劉玄靖は朝廷に二度赴き、一度は尊崇され帝師となったが、その師である田虚応が憲宗の招きを拒絶したり、同門の馮惟良らが天台に隠居して「徴されるに就かず」というのに比べれば、政治と疎遠であるべき隠者本来のあり方を保てなくなってしまったのである。

## 五、結語

新しい資料の発見は、往々にして以前から存在する史料に対する理解とその使い方を活性化してくれる。晏殊の『類要』が引用している晩唐・趙櫓の「劉玄靖伝」の四つの佚文が発見されたことは、我々が『南岳総勝集』にみえる「劉玄靖伝」の史料の来歴について認識を新たにすることで非常に重要な意義があった。比較検討することでたやすく発見できるのは、前者の佚文のうち最も長い二つの文は、後者にほとんど全ての文字が残されているだけでなく、さらに趙櫓の自称の痕跡を残しているということである。かなり確実にいえるのは、陳田夫が南宋時代になお銓徳観（唐代の衡岳観）にそびえたっていた趙櫓の「劉玄靖伝」をよく利用していることと、また部分的には蕭鄴の「劉玄靖碑」を参考にしているということである。この知識をもとにすることで、『総勝集』にみえる資料を安心して存分に使うことができ、ほかの唐代の文献と総合的に考察することで、あのばらばらで矛盾のある記事からはっきりとした手がかりが得られ、劉玄靖の生涯における重要な時期を再構成できるのである。なんといっても、「劉玄靖伝」は彼の死の二年後に衡岳観に立てられたものであり、最も信頼できる一次資料なのである。

劉玄靖は一生涯、主に衡山と長安の二つの地で活躍し、自身は「南岳天台派」

注 71… 趙璘『因話録』巻四「角部」、93頁。この書も「周混汗」を誤って「周混沌」としている。

の宗師である田虚応の四大弟子のひとりとして、湖南一帯で非常に声望があった。敬宗・武宗時代の二度にわたって入京し、その期間は短かったものの、武宗に三洞の法籙を授けたことから「広成先生」の称号を得て、帝師として尊崇を受けた。しかし、趙歸真ら宮廷道士が積極的に朝政に参与し、熱狂的な廃仏を扇動していたのとは違い、劉玄靖は政治の危険さを深く理解しており、急激に廃仏を進めれば道教にも危害をおよぼすことが分かっていた。ゆえに功成つたのちに引退し、早々と長安を離れ、宮廷という面倒な場所に別れを告げたのであった。その一方で、劉玄靖は晩唐時期の権力構造を身にしみて分かっていたため、湖南監軍使や内廷の宦官とは良好な関係を保っていた。宣宗が即位したのち、劉玄靖は朝廷の誅殺リストに一度は名が載せられたが、すぐさまあらためて朝廷と地方官府の厚遇を受け、ひいては衡山から宣宗に法籙を「遥授」するにいたっている。このような経歴を持つ中晩唐時期の道士はほかにいない。

またそれゆえに、彼が仙去したのち、蕭鄴・盧弘宣・趙櫓・盧潘といった地位も名望もある官僚や士大夫たちが次々と「碑」や「伝」を撰し、さらに書いたのである。しかしながら、本質的に見て、劉玄靖は三代の皇帝と交わりがあったにもかかわらず、純粋な意味で政治に没頭した宮廷道士とはいえない。『南岳小録』や『南岳総勝集』などの地方色のある文献の書き方からすると、彼の衡山における存在感はさらに大きく、山中の宮観や石室、それに山水など、いたるところに彼にまつわる歴史の記憶が留められていたのである。あるいは宮廷の繁栄とは儚いものであり、ただ山林における幽寂のうちに、太古から続く永遠なるものがあるのかもしれない。

付記：本稿は「隋唐長安の社会と文化」ワークショップ（北京大学中国  
古代史研究中心、2012年11月29日）に提出したものである。榮新江・  
孟彦弘・陸揚・朱玉麒・郭桂坤先生たちのご指導を受け、劉屹・唐雯先生  
たちにも書面でご意見をいただいた。さらに、『歴史研究』誌の匿名の査  
読者である二人の先生には多くの貴重な意見と提案をいただき、原稿を修  
正するさいに参考にした。ここに記して謝意を表します。

補記：本稿は『歴史研究』2013年第6期（164－174頁）に掲載され  
たものである。紙幅の制限により、誌面では『類要』が引用している「劉  
玄靖伝」と『南岳総勝集』所収の「劉玄靖伝」との比較表を省略してしま  
ったので、この日本語版には原稿のとおり追加してある。

原文：中国語

訳者：酒井規史